



東北森林管理局 森林技術センター

平成18年
夏号 **たより**

〒037-0305
青森県北津軽郡中泊町
大字中里字亀山540-8
TEL 0173-57-2001
FAX 0173-57-4929
E-mail:t_gijyutu@rinya.maff
.go.jp

森林・林業分野の技術開発について

所長 添谷 稔

当センターの所長室にも、森林・林業に関する様々な書籍があります。歴代の所長が記したアンダーラインや書き込みだらけのページをめくるたびに、「もっとがんばらなきゃ」と思う毎日です。先日、「研究と技術と森林・林業のかかわり方」(赤井龍男・神崎康一「林業技術」No. 573 1989)というタイトルに思わず目がとまり、興味深く読みました。

林学は実学であるにもかかわらず、林学研究と林業が「遊離」していて、林業の発展のためになる成果はあまりないのではないかと、「林業ニーズの林学研究への取り込み」が必要ではないかといった内容で、研究者自らが学会の現状をあえて批判的に論じています。このなかで、研究と現場をむすぶ「はっきりとした技術開発分野」があるべきとした、以下のくだりが特に印象にのこりました。

「林学が科学分野の一部門だとすれば、その生み出した客観的普遍性は・・・いつの日にか林業技術を改良するのに直接、間接に利用され、林業に何らかの形で貢献すべきであろう。しかし、一方に科学研究があり、一方に林業という実業があるだけでは、このつながりはうまく機能しない。この間にはっきりとした技術開発分野があるべきである。」

「・・・実際は研究成果の実用化を図るためのもっと現場に密着した技術開発専門分野が必要であろう。本来、林業の経営体は他産業に比し一般に技術開発力は弱小であるので、国公立の試験研究機関がこれを担うべきとも考えられるが、筆者にはどうもこの分野が林学、林業の世界ではまだ未分化なのではないかと思われるのである。」

ますます細分化、専門化する研究成果を現場に活用するためには、まさに、現場ニーズのなかで行う技術開発が必要であり、この機能は、自ら林業経営を行うかたわら

技術開発を行う国有林、とりわけ森林技術センターに求められるのだと思います。

管理経営基本計画に規定されている「産学官連携」が必要な理由もこうしてみるとよくわかります。

先月、高尾の研修で学んだ以下の言葉も、身にしみます。

「雑多な研究成果が実際の造林家の頭にバラバラの知識として雑然と詰め込まれてもそれだけでは技術にならぬ。」(「日本の森林」四出井 1974)

技術開発の難しさをあらためて感じる非常に重い言葉です。「たいへんな職場に赴任してきたものだ」というのが、正直な感想です。

このあたりで、「人がいない、金がない・・・」といったナイナイ話の言い訳をついつい言いたくなりますが、ここは所員一同、グッとこらえてがんばっております。かつては(かなり昔ですが・・・)、国有林が学会をリードした時期もあったのですから!

今後ともご指導のほど、よろしくおねがいします。



【八甲田山にて】

森林管理局総務部長及び青森事務所副所長（連絡調整担当）による安全指導が、5月30日に実施されました。

当日は、薄市山334い1林小班のスギ人工造林地において、収穫（間伐）調査の点検・指導が行われました。

当センターより所長ほかが同行しました。

当センターの重点課題の取組みである「安全で正しい作業手順と作業行動の徹底」を中心に総務部長より直接指導いただいたのち、当センターに立ち寄られ、センターの現状などにつき、視察されました。



【安全指導の様子】

平成18年度 安全衛生大会を開催

～ 慣れた作業に潜む危険！
活かすぞ経験無くそう過信 ～

7月6日、当センターの安全衛生大会が、中泊町ふれあいセンター会場で開催されました。

局長メッセージの代読の後、所長あいさつでは、災害はなんの脈絡もなく突然発生するのではなく、その背後には、数百のヒヤリ・ハットがあるといった、いわゆる「ハイリッヒの法則」につき、実際の災害事例をもとにした説明がありました。

また、例年どおり中里消防署及び五所川原警察署のご協力を得て、救急法講習と安全講話が行われました。

毎年行われる安全大会はややもすると、内容がマンネリ化しがちですが、本年は、人工呼吸救命法に加え、AED（自動体外式除細動器）に関する講習が初めて行われ、所員一同新鮮な気持ちで訓練にのぞみました。

また、所長より、昨年の愛知万博で一般のお客様の方が近くのAEDを活用し、倒れた方の救急救助を行い一命を取り留めた事例が報告されました。

安全対策は、作業するものにとり、面倒に感ずる一面があることは正直だれでもあることだとは思いますが、面倒だからとい



【安全衛生大会】



【AED講習】

って、手を抜いたことが原因で災害が発生してしまっただけでは、元も子もありません。

その日その日を「ゼロ災害」で終えたということも業務の大きな成果です。今後とも気を引き締めてがんばっていきたく思います。

なお、当センターの本年度の最優秀安全標語は、日常の業務で発生したヒヤリ・ハットについての検証、対応策を話し合い災害の芽を摘んでいく場である日々のミーティングの重要性を心に刻む以下の標語が選ばれました。

※ 平成18年度 森林技術センター 最優秀安全標語
「ミーティング 日頃の状況話し合い 安全作業で無災害」 藤森啓悦

試験地や実験林はまさに「データがなければタダの山」。当センターにとって、各種の調査データの集積は重要です。

現場については、造林、収穫調査などの各種事業もとりあえず一区切りが付き、よ

うやく技術開発に関する業務が本格化してきました。

ここしばらくは、ほぼ一ヶ月ほど雨が降らず、特に8月に入り、連日炎天下での作業ですが、毎日がんばっております。



【ヒバ巣植え試験地での地拵え】
(7月10日 570林班にて)



【お盆休みも返上で、調査実施中です】
(8月15日 219林班にて)

増川・大畑のヒバ施業実験林について

当時の青森営林局技師であった、故松川恭佐氏らの「森林構成群を基礎とするヒバ天然林施業法」の実践の場として、昭和6年に津軽・下北両半島に設定された、増川・大畑のヒバ施業実験林については、過去の貴重な調査データを当センターに集め、その解析や今後必要な調査内容の検討等を実施していくこととしております。

その一環として、森林技術センターによる現地の現況把握を7月～8月にかけて行ってきました。増川実験林にいたる県道286号線が、道路災害復旧工事のため全線通行止めになっていることから、本格的な調査はまだ先になりますが、今後、森林総研と共同で作業を実施していく予定です。

写真は増川実験林

旧森林鉄道鉄橋付近(実験林設定当時と現在)



今年の5月に、中泊町滝ノ沢ふるさと砂防愛ランドのせせらぎ水路において、ホタル放流式が開催され、当センターからも参加しました。

参加者は青森県、中泊町、中里小学校5年生児童及び中泊町ホタルの会ほか多数の参加者があり、前中里小学校長からホタルの成長過程や種類などの説明の後、ゲンジボタルとヘイケボタルの幼虫と餌になるカワニナを、一緒に優しく放流しました。

子供達は小さい、かわいい、気持ち悪いなどとホタルとカワニナを観察し、7月には順調に成長しホタルの光舞うことを願っていました。



【ホタルの放流状況】

学会、地域と連携した講演会を開催

当センターがあります青森県中泊町では、木炭や木酢液の有効利用に関する地域の関心が高いことから、日本木質炭化学会、秋田県立大学、青森県、中泊町と森林技術センターが連携し、東京大学名誉教授の矢田貝 光克 先生（木質炭化学会会長）及び青森県中南地域県民局の小枝 均 主幹を講師にお迎えしての講演会を開催しました。

この分野の第一人者である矢田貝先生のお話を聞けるとあって、平日の午前中にもかかわらず会場はすぐに満席となりました。

木炭、木酢液に関する最新の研究成果から身近な活用方法まで、多岐にわたる内容に会場の関心も高く、予定時間を超えて講師との質疑が行われるなど、盛況のうちに終了しました。

消費者が直接手に取り利用する木材、木炭などに関する知識は、森林・林業にあまりなじみのない方々との重要な接点でもあり、当センター所員も今回の講演は非常に勉強になりました。



【講演する矢田貝先生】



【講演会場の様子】



編集後記

津軽地方は「やませ」のため山に雲がかかり心配していましたが、ようやく蝉の鳴く暑い夏となりました。ここ中泊町でも夏祭り及びお盆シーズンを迎え、当センターも地域の行事などへの参加が多く

なる季節です。そんな中、今年度第2号を無事発刊できました。今後は、もう少し内容が充実するよう、センターの本業である技術開発業務をさらに外に見えるように努力していきたいと思ひます。